

目的 唾液中の $\alpha$ -アミラーゼ活性は、食後1~2時間後に活性の上昇が認められた。活性上昇発現までの時間差を生じさせる要因の一つとして、咀嚼という直接的機械的刺激との関連性につき検討を加え、咀嚼は短時間の刺激であり、時間差の直接の原因とは考えられないという結果を先に報告した。そこで本研究では、食生活の中での様々な要因のうち、食物の胃内停滞時間との関連性につき検討することを目的とした。

方法  $\alpha$ -アミラーゼ活性の測定法としては、Dinitrosalicylic acid法を用いた。唾液は口腔内に自然に分泌される各唾液腺由来の混合唾液を一定時間採取し、よく攪拌したのち適宜希釈して用いた。

結果 本学女子学生(19才)4名を被検者とし、何も喫食させない場合、水100ml飲ませた場合(胃内停滞時間約1時間)、おもち100g食べさせた場合(同2~3時間)、30分毎に5時間後まで連続5日間づつ唾液を採取し、活性、pHを以て唾液量を測定しその変動を比較検討した。水の場合1~1.5時間後に、おもちの場合喫食直後(咀嚼による上昇と考えられる)、2~3時間後の2点で活性の上昇が認められ、 $\alpha$ -アミラーゼ活性の変動は、食物の消化時間、即ち消化機構とも関連性があるのではないかと推察された。さらに活性変動の直接因子であるタンニン、特に紅茶の影響が顕著であることを先に報告したが、同種の葉で製造法の異なる茶を調製し、同様に検討を加えたので合わせて報告する。